

最優秀賞

(熊本県人権擁護委員連合会長賞)

「命の音」

人吉市立第一中学校 二年 木下 絵莉

ザーツ。ザーツ。と、勢いのある音。その音は、激しく流れる、水のような音がします。みなさんはこの音を、何の音だと思いますか。雨の音や、波の音…、他にも色々な音がありますが、私が表現した、ザーツザーツと、いう音は、”命の音”です。

この、命の音は、私の父の、左腕から聞こえます。それは、父の腕には、”シャント”があるからです。シャントとは、腎臓の働きが悪くなり、血液透析が必要になった人の、腕に作られます。透析には、十分な血液量が必要なので、動脈と静脈をつないで、シャントを作ります。

父は、私が四年生の時に、透析が必要になりました。その時に、シャントを作ったのです。初めてシャントに触れた時の、衝撃を憶えています。父の腕から伝わるその感覚は、軽く触れるだけで、ザーツザーツと、強い振動とともに伝わります。初めて触れた人は、その衝撃に驚くでしょう。こ

の音が、私にとつての、”命の音“なのです。

父は、週に三回、仕事が終わった後、夜の七時から五時間、透析をしています。天候や体調がどんなに悪くても、休む事は絶対にできません。透析とは、体の中の老廃物を、排出することが困難になった場合に、人工腎臓を使って、血液をきれいにする事です。父が生きていく為には、腎臓を移植しない限り、一生、透析を続けなければならないのです。父にとつて、シャントとは、とても大切な、命綱なのです。

父が透析をするようになり、私は、「どうして父が病気になるってしまったのだろう…。苦しまなければならないのだろう…。」と、思いました。父は、とても温厚な人です。私は叱られた事が、ほとんどありません。父は、人に対して、優しく接します。父が、他人の悪口や、愚痴を言っているのを聞いた事ありません。そんな父がどうして…と、私は、悲しくなりました。しかし、これが現実なのです。きつと、悔しい思いをしているのは、私よりも、父、本人だと思いました。私には、透析をしている父と、少し足の不自由な、母がいます。両親共に、障がい者なのです。もしかすると、両親に、



障がいがあるという事だけで、偏見を持ち、私を、「かわいそう。」と、言う人がいるかもしれません。しかし、両親を間近で見ている私は、今を受け入れ、障がいと共に生きている、父と母を誇りに思っています。私は、父と母を見ていて、教えられた事が、たくさんあるからです。もしも、私の両親が、健常者であつたなら、気付かない事、だったのかもしれない。命を、音として捉える事も、多分なかつたと思うのです。

テレビでは、人権や権利を無視した、悲しいニュースが流れます。その度に、私は、悲しくなり、目を背けたくなります。健康や命の大切さを、身近に感じている私にとって、辛いニュースなのです。人の権利、何より命を軽視されているようにさえ、感じるからです。国会での、臓器提供や、脳死についての議論も、伝えられていました。治療法として、移植しかない父の事を考えると、複雑な気持ちになります。提供される側と、提供する側の気持ち、人権や権利という言葉だけでは、到底解決できない、とても難しいことだと思ふのです。私は、一人でも多くの人に、たった一日、明日を迎える為にさえ、懸命に生きている人がいる事を、知ってほしいのです。健常者も障がいがある人も、人であり、かけがえのない、大切な命なのです。友達や周りの声、家族の存在で、「生きている」という現実を感じ、少しだけでも、その声に耳を傾け、命を大切に、生きてほしいのです。人権や命を尊重する事の大切さ、チャンスや希望を、平等に与えられる事の大切さを感じ、考えてほしいのです。

私は、命の尊さを教えてくれた、ザーツザーツという、父が生きている証の音に、感謝しています。何故なら、私に、勇気と頑張る力をくれる、命の音だからです。